

## 経験と言語の溝

—— 夏目漱石『吾輩は猫である』の最初と最後のページ ——

永野宏志

人間が動物になる話は、物語世界では古代から多く存在する。一般に近代以降の小説では、小説内で主人公が動物になる場合は幻想に、作家が小説の主人公を動物にする場合は人間社会への批判あるいは子供に語るための寓話とされる。

この中で、夏目漱石『吾輩は猫である』（一九〇五・一——一九〇六・八「ホトトギス」）は、主に人間社会への批判と長らく評されてきた。他の登場人物に揶揄や批判を浴びせる猫の言葉に焦点を合わせれば、猫の言葉と作家の意図の対応が必要である。その上で、作家が猫である理由が、当時の作家の精神の状態に帰される。

では、一人の人間が猫になるとはどういうことか。「吾輩」としての話しぶりとなだの猫であることの落差は、小宮豊隆以来「滑稽」として注目されてきた。しかしそれは、漱石の他の小説と比べた場合の解釈である。<sup>①</sup>むしろ、小説が「滑稽」を引き起こすとはどのようなことか。この落差が経験と言語にどう関わるのか。この点で

アリズム小説との違いは何か。このような問いを立てた場合、小説ジャンルにおける経験と言語の関係が考察のテーマとなる。

### 一 フレームとコンテキスト

「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」

（『吾輩は猫である』 一）

人間世界に放り出された猫は単なる生きものとして登場する。人間たちと共通の言語や生活習慣を持たない猫は自らの感覚世界に生きている。猫の独白は登場人物たちには聞こえない。しかし、それでは小説にならない。同族の猫たちを除いて、猫は読者に向けて饒舌に語り続けるから小説になる。そう論じたのは「吾輩は猫である」という最初の一文を、「形式論理学でお馴染みのSはPであるの公式に即している」とした前田愛である。<sup>②</sup>

「吾輩は猫である」は「吾輩（＝人間である私）は猫である」というもうひとつの位相を潜在させているわけであって、読者はこの二つの矛盾した位相を引き受けることによって「猫」の物語る世界に参加することが許される。S・Pの断言的な形式は、「吾輩」が作者（語り手）であり、猫でもあるという矛盾を隠蔽しているという巧妙なトリックなのである。しかも第二文の「名前はまだ無い」は、いったん猫という普通名詞で限定された「吾輩」を、固有名詞をもたない無限定な存在にひきもどす。猫は喋ることによってのみ、また喋っている間にかぎって存在を許される純粹だが不安定な語り手なのである。

（前田愛「猫の言葉、猫の論理」）  
「形式論理学」で解釈すると、論理空間よりも「である」の断言の口調や「吾輩」や「猫」という要素の二重性の特徴のほうが逆に際立つ。この理由を前田はそのあとに続く「名前はまだ無い」という否定文に求め、この小説の他の登場人物に比べて猫の語りには否定形が多く使われている点に注目する。「まだ無い」が論理的な否定辞と同等に扱えるかという成否は別として、論理学言語でいったん解釈してみることに意味がある。

まず、「吾輩は猫である」という文を論理空間で考えれば、第一に、これは言葉を喋る猫を想定する以前に、生物という集合に属し、無生物とは領域を異にするというフレームを与える言明である。しかし、言語を操る生物である人間の誰かに対する発話として解釈するように、小説の第一ページめというコンテキストが促

している。このようなフレームとコンテキストとのギャップが修辭的な曖昧さを生んでいる。

加えて、次の文「名前はまだ無い」という意味は、尊大な発話としての前文の調子自体を否定するコンテキストへと開く。しかし、この文が論理的言明とすれば、その構造からしてきわめて人間的なコミュニケーションである。動物のコミュニケーションでは、否定はないとされるからだ。グレゴリー・ベイトソンによれば、人間の「デジタル」な言語（この場合論理学的言語と見ていい）に対して、猫や犬やイルカなど他の哺乳類のコミュニケーションは「アナログ」であるという。<sup>3)</sup>

人間において語句による言語 verbal language が獲得されたことの本来に新しい、すばらしい点は、それによって抽象化や一般化が可能になったということではない。むしろ、関係以外の事柄を具体的に特定することが可能になったということだ。（中略）彼ら「哺乳動物引用者注」は進化のある段階で、愚かにも関係のゲームに巻き込まれてしまった。お互いに向けられた行動を、相互関係という複雑でのつびきならぬ主題との関わりから解釈する必要に迫りやられてしまった。そしてこのゲームの開始とともに、知恵と巧妙さをもってプレイするということに生存上の価値がついてしまった。そう考えればいいわけだ。

（グレゴリー・ベイトソン「クジラ目と他の哺乳動物のコミュニケーションの問題」——海中環境における高度な非言語的コ

## 「コミュニケーション」

ベイトソンによれば、子猫が母猫や飼い主に空腹を訴える場合、その鳴き声は「ミルクー」と対象を指すことはできず、「依存！依存！」という鳴きかけられた者との関係を意味する。すると、「関係以外の事柄を具体的に特定することが可能になった」デジタルな言語と、「相互関係という複雑でのつびきならぬ主題との関わり」から解釈するアナログな非言語の違いは、否定の有無に関わるのではないかとベイトソンは別の箇所で推測している。アナログな非言語のコミュニケーションが、デジタルな言語コミュニケーションの形になるには、図と地を切り分け、対象として特定できる否定という操作が必要だからだという（「遊びと空想の理論」<sup>4</sup>）。

確かに、「吾輩は猫である」という文は、同一集合内に属する言明ではない。「猫は猫である」と異なると、主語「吾輩」と特定された個体は「猫」という類の集合とは別の集合に属していることを当初から主張している。さらに、他との関係を表わすコミュニケーションとして人称「吾輩」が、小説内の発話というダイナミックな領域を引き入れ、論理的に固定されたフレームを壊してしまふ。

だが、際立たせられた発話のコンテキストは、今度は次の文「名前はまだ無い」によって、否定からフレームを作る形式論理学の前提へと回帰するようにみえる。前田の分析のように、「吾輩は猫である」を形式論理学「S-P」（前田前掲）でフレーミングする場合、同一の世界（集合）として考える必要がある。だが、その

際に惹き起こされるのは、二つのコミュニケーションの一致を阻む悪循環なのである。

では仮に、同一空間内で、対象を限定する言明と、動的な関係の非言語的コミュニケーションの循環によって生じる効果が笑いだとしたら、両者を何度も行き来しながら伝達されるものは何だろう。小林信彦はある「観念の化身」として造形された人物を「フラット・キャラクター」と呼ぶエドウィン・ミュー『小説の構造』を引きながら、次のような指摘をしている<sup>5</sup>。

太平の逸民派「苦沙弥家に集まる人々」引用者注」も俗世間派「金田家に集まる人々」同上」もフラット・キャラクターとして登場し、読者の笑いを誘う。ここでの笑いの中には、文字通り〈お笑い〉と〈嘲笑〉があるのだが、大半の読者は、太平の逸民派も俗世間派も、ともに、作者の嘲笑を浴びていると考えて、〈諷刺〉などという言葉（便利ではあるが、その実、何も言っていないに等しい）を持ち出して、ことが片づいた気になってしまふのだ。

（小林信彦「吾輩は猫である」とフラット・キャラクター」）坪内逍遙から自然主義に至る明治期の日本のリアリズム小説は、ミューの言う立体的な「ラウンド・キャラクター」を目指してきた。英文学や落語で培った教養から、それに対する批判として漱石がフラット・キャラクターを採用したと小林は述べる。ではフラット・キャラクター小説は何を表現しようとしたのか。ミューによれば、十七世紀に「ただ一つの観念あるいは性質を中心として組み立て

られる」この人物の性格は「気質（ヒューモア）」と呼ばれていたという。<sup>6)</sup>この言葉が『吾輩は猫である』にも出てくるアリストテレスの四つの体液（Humor）の循環つまり代謝に由来することを考えれば、小説自体に生きた身体同士のコミュニケーションを惹起する仕掛けがあった。その平易なわかりやすさは、書かれる内容の現実性よりも、読まれるたびに笑いを引き起こし、読者の身体を笑いによって揺るがし、生命としての代謝を促すほうに重きがあつたと思われる。

『吾輩は猫である』の冒頭の二つの文は、フラット・キャラクターのように「ただ一つの観念」でできた「形式論理学」のフレームで捉える場合、その尊大さとは裏腹に、ただの猫という生きた現実のコンテクストに引き下ろされる。だが、「名前はまだ無い」と語り人間的な否定を使う場面になると、今度は形式論理的なフレームへと差し戻される。この二つのコミュニケーションのギャップ循環するループが、『吾輩は猫である』の世界を形成している。そこで、この論では、いったん二つのコミュニケーションの世界に分けて考えたいと思う。

## 二 経験と言語の区別

Humorは生きているからこそ変容する。この小説に「諷刺」という言葉を冠することに小林信彦が異議を唱えたのは、笑いもその対象によって変わり、時間とともに変容するからである。だが、

変わるのは気質（ヒューモア）ではない。登場人物たちの気質は変わらないが、彼らが対話し、衝突し、動くたびに、関係が変化し、作品とそれを読む人たちの体液（ヒューモア）の循環が変わるのである。『吾輩は猫である』では、猫以外の登場人物の気質は変わらないが、それを観察する猫の環境との関係や生命力の度合はそのつど変わり、笑いの質を変えていく。この生きることの不安定さこそこの小説に必要なものである。それはベイトソンの言うアナログなコミュニケーションを際立たせる。つまり生きた関係を表現するのである。

この小説執筆と同時進行していた東京帝国大学の講義で、講師夏目金之助は英文学に対する自分の経験を論理としてどう組み入れていくか試行錯誤を繰り返している。まず演繹的な論理が、次に帰納的な論理が退けられる。ともに英文学の境界設定の内部に留まる論理的推論だからである。漱石にとって英文学とは他者であり、形式を内容に対応させるための前提は共有できない。『文学論』中盤ではこの前提は、キリスト教的な神の概念の共有となつて、漱石をロマン派文学への批判へと向かわせる。漱石にとって境界画定するのは内部にあるのではなく、他者の経験である。

『文学論』（一九〇三・九—一九〇五・五講義、一九〇七・五 大倉書店刊）がその冒頭で行なうのは「文学的内容の形式」への変更である。この場合「内容」が個々の経験を指す。個々の経験が文学を作るとすれば、文学的内容が形式を獲得するには様々な時間的空間的形成が問題になる。それを省いて、形式と内容に対応さ

せるのは、経験を共有する前提を問わないだけである。つまりこの生きた世界に生きた経験をしているという単純な事実を除外している。この主張は「滑稽的聯想」と呼ばれる文学表現の際に指摘されている。この講義では、「洒落」「口合」などの笑いが、英語という言葉のどのような組み合わせから起こるかがテーマである。漱石は英語圏の外にいる「無識あるいは誤解等」の側から、笑いの質について検討を加えるという姿勢で臨んでいる。

尊称に‘your grace’といひ、神恵にも‘grace’といひ食前  
 侍詞にも‘grace’といふ。この三gracesを字音の媒介により  
 て結合したるがこの会話の姿致ある所なり。ただその前者と  
 異なる所は洒落そのものの性質もしくは優劣にあらず、これ  
 を口にするものの性格なり。普通この種の聯想に耽るものは  
 皆その洒落なる事を自覺して好んで才を使ふに過ぎず。吾人  
 がこれを聞いて滑稽と感ずるはこれを口にする人物を滑稽と  
 視るがためにあらずして洒落そのものを鑑賞するにすぎず。  
 従つて吾人の洒落に対する感じと洒落を口にする人に対する  
 感じとは全く独立して相犯さざるを常とす。然るに今一人あ  
 りて或る原因のため（無識あるいは誤解等）洒落と心付かず  
 して真面目に放つ事あれば、吾人の洒落に対する滑稽感は直  
 ちにその人物の上に落ち来るが故に単に言語のあやのみにて  
 得る感じより数段活躍せざるを得ず。如何となれば、この際  
 における滑稽感の目的物は死したる一句にあらずして血あり  
 肉ある具体的な活物なればなり。彼の口にせる滑稽は彼の

格に附着して離るべからざるが故に、彼の滑稽は彼の人格の一部分なりと断定し得るが故に、この格段なる滑稽の小窓を通して線香花火の如くに消滅するものにあらず。忽然として人口を脱して天籟の妙音となり、画龍水を得て一躍天に登るに至る。Falschの滑稽の如きは多少これに近し。

〔第四篇 文学的内容の相互関係 第四章 滑稽的聯想〕  
 『文学論』所収）

意味空間を共有した上で「言語のあや」によって笑いを引き起こす「洒落」と区別されているものは、「血あり肉ある具体的な活物」の引き起こす笑いである。漱石が両者を分けるのは、形式／内容の枠内では対応するはずの経験と言語に画然とした溝があるからだ。これは『文学論』冒頭の「文学的内容の形式」の捉え直し以来、追及され続けている問いである。すべてが言葉という枠内に翻訳可能かという問いは、経験は言語に集約されないという主張を導き出す。この経験の側に起こる笑いが「血あり肉ある具体的な活物」と呼ばれる。

だが、言葉に集約できない経験を言葉の対極におこうとする場合、言葉に特徴的な否定の力を使うという矛盾を犯さざるをえない。『吾輩は猫である』では猫の言葉は登場人物に届かない。作品内の生活世界では、猫は「血あり肉ある具体的な活物」である。だが、そんな猫の経験が読者に向けて言葉として発話される場合、やはり否定の形をとる。「吾輩は猫として進化の極度に達して居るのみならず、脳力の発達に於ては敢て中学の三年生に劣らざる積りで

あるが、悲しいかな咽喉の構造だけではどこ迄も猫なので人間の言語が饒舌れない。」(『吾輩は猫である』三) という一節からも、否定形の頻出を見る前田愛は、その理由を以下のように述べる。

猫の世界とは異質な人間の世界の観察から得た新しい情報は、はじめは彼のもっている既成の常識とは馴染まない。しかし、彼は新しい情報を整理し、分類し、常識の枠をやぶつてもうひとつの認識を獲得する。このような猫の屈折した思考過程を「SはPならずしてQなり」の定式であらわすことができるとすれば、猫の語りに頻出する否定形の意味するものもはや明らかであろう。それは「吾輩は猫である」という書き出しに托されていた吾輩(人間)≡猫という二重性から導き出された文体的な表徴なのである。(前田愛前掲)

最後の行の「吾輩(人間)≡猫」という等式を導出するには、「SはPならずQなり」という捉え方が、語り手としての猫が「吾輩(人間)」と同じ世界に属するという設定が必要である。PとQが同じ集合内の二要素として設定されるからこそ、「吾輩(人間)」は猫と等号で結ばれる。すると「≠ならず」という否定は、同一空間内の選択として捉えられる。だが、生活世界では単なる猫であるという設定は、人間の言葉を読者に語ることによって経験と言語の溝を埋めるものではない。猫の世界と人間の世界が「異質」(前田)だからこそ、猫は登場人物たちと言葉を交わせないのでから、PとQが同一空間内がないという設定が必要である。

『文学論』での漱石は、経験を言語と独立してそれ自体として取

り出す場合、形式／内容という同一集合内の論理的推論を退けたが、『吾輩は猫である』ではさらに進んで、登場人物の世界にいるときの非言語的コミュニケーションと読者に話しかけるときの言語コミュニケーションを別の世界に設定する。この区別が否定で表現されている。つまり、前田の言うような同一集合内での選択としての否定ではなく、属する世界自体の区別としての否定である。

演繹でも帰納でもない第三の推論である仮説推論(アブダクション)が採用されるのはこのためだと思われる。<sup>8)</sup> この推論は二つ以上の集合の間に起こる。その原義に「誘拐」の意味を持つのは、同一集合内ではない他の集合への推論だからである。医者が患者の表情から体内の異常を診断する際に使われるという例にあるように、日常生活では目に見えない動き等を推論する際に用いられる。人間である作家が飼う猫の生きる世界を推論し、猫が自分の世界から人間の世界を推論する。この場合「SはPならずQなり」という命題における「≠ならず」という否定は、二つの集合の区別を表現することに等しい。

この推論がフィクションの次元で効力を発揮できるのは、経験と言語の溝を埋めないまま、二つの世界として提示可能だからである。リアリズム文学の表現では、経験と言語が対応しなくては現実の表現とは見なされない。太陽を見て月と言え、そこに虚構が入るとされる。しかし、太陽を見て月という者に語らせることができるのがフィクションの力である。

初期の漱石は様々な文体を試みて小説を書いた。この時期を「低徊趣味」と呼ぶように、小林英夫も文体論の見地からこの時期の漱石に、「博大な学識か、豊かな想像力か、語詞の自在な駆使力」によって「現実遊離の傾向」があると述べる<sup>9)</sup>。だが、小林のいう「現実」とは何だろう。それがリアリズムからの発想なら、漱石の「現実遊離」が現実からの逃避でないことは確かである。むしろ、「現実」がどう構成されているかを見直すために別の集合に「遊離」することもある。ただ妄想するために想像力があるのではないように、虚構を書くために小説があるのではない。言語に集約されない経験を強調する際に、様々な小説文体が試みられる場合がある。だが、この強調したからと言って、経験そのものを純化し、取り出せることにはならない。むしろ、経験と言語の溝が際立ってくるからである。

### 三 発話の力の時空

漱石が後に『文学論』にまとめられる講義をしながら、『吾輩は猫である』を連載していた時期と相前後して、西田幾多郎は金沢の四高で「純粹経験」を取り出す作業に着手している。後に『善の研究』（一九二一）にまとめられる講義は明治三十九年に始まった。檜垣立哉は二十世紀初頭、経験に注目する動きを、その西田論で「世界的同時性」と呼び、「日本的な文脈を超えて」（檜垣）、「純粹化」する欧米の哲学の動向（W・ジェイムズやベルクソン）と西

田の「純粹経験」が、「生命論」や「有機体的な関係性」として「強い親近性をもつ」と述べている<sup>10)</sup>。

この「親近性」の理由を検討するのは、この考察の範囲を超える。今とりあえず注目したいのは、西田の「純粹経験」の取り出し方と漱石のそれとの違いである。檜垣は西田の「個人あつて経験あるにあらず、経験あつて個人あるのである」（『善の研究』一―四）という一節を引き、「未分化であるはずのこうした場面に、はじめから区切りを入れてしまうのが、近代の認識論の装置の誤りである」とする。この「未分化の経験」にはなんら神秘はない。「純粹経験」は「行為」のさなかに起こる経験である。瞬間瞬間の「実践」なのだから、そのつど世界と私のように分けることはできない。西田はこう述べている。

普通では純粹経験が客体的實在に結合せられる時、意味を生じ、判断の形をなすという。しかし、純粹経験説の立脚地により見れば、我々は純粹経験の範囲外に出ることはできぬ。意味とか判断とかを生ずるものもつまり現在の意識を過去の意識に結合するより起こるのである。意味とか判断とかいうのは現在意識と他との関係を示すもので、すなわち意識系統の中における現在意識の位置を現わすにすぎない。例えば、ある聴覚についてこれを鐘声と判じた時は、ただ過去の経験中においてこれが位置を定めたのである。それで、いかなる意識があつても、それが厳密なる統一の状態にある間は、いつでも純粹経験である。これに反し、この統一が破れた時、す

なわち他との関係に入った時、意味を生じ判断を生ずるのである。(中略) 意味とか判断というものはこの不統一の状態である。しかし、この統一、不統一ということも、よく考えてみると畢竟程度の差である、全然統一せる意識もなければ、全然不統一なる意識もなかるう。すべての意識は体系的発展である。

『善の研究』一一一

ウィリアム・ジェイムズが「意識の流れ」と呼んだように、人は行為する以上、意識も「体系的発展」のさなかにある。近代認識論の意識は、この点では「現在意識の位置を現わすに過ぎない」(西田)。意味や判断によって「現在意識」にしばし固定されるだけである。この西田の論理を、バイトソンの非言語コミュニケーションと言語コミュニケーションに接続すると、行為の継続からなるアナログ的な「純粹意識」に対して、意味や判断に分節するデジタルな「現在意識」という理解が可能だろう。すると、重要なのは判断や意味によってアナログ・コミュニケーションをデジタル化する言語の位置である。確かに『善の研究』での西田は「純粹経験」を取り出すにあたって、ほとんど言語について触れていない。「現在意識」を構成する意味や判断にそのデジタルな様相をすでに織り込んでいるようにも思える。<sup>①</sup>

だが、漱石にとって言語は現実機能しており、意識を云々する場合も、論理空間のような透明性を持つ世界の言語ではない。彼にとって言語は会話レベルにある物質的なものであり、具体的な力が作用する世界にある。「個人あつて経験あるにあらず、経験

あつて個人あるのである」と述べる西田は、「純粹経験」や「もの」の側という不可能事に身を置いて個人や意識を捉えようとするが、漱石は経験を強調するほど言語との溝自体に身を置くことになる。それゆえ、英語という他者の言語と自らの経験の齟齬そのものが主題となる。バイトソンに接続するなら、漱石にとって言語において非言語コミュニケーションがあり、非言語において言語コミュニケーションがある。

この循環の場合こそが、フラット・キャラクターたちの饒舌さが延々と続き、そのつど猫との関係が変わっていく発話行為の力の時空である。この時空で猫は言葉の内容よりもその関係の中に身を置き、読者に意味を差し引いた発話に起こる様々な力を価値付けていく。登場人物たちの言葉における振舞いが、猫の紡ぎ出す批評的な言葉によって読者へ意味より価値に重きを置いたまま伝達される。経験と言語がぶつかり合うこの溝での出来事に、読者は自分自身のヒューモアを揺さぶるのである。

この溝があらわになるのは小説のラストである。最後のページには、自らの死を状況中継するような猫の言葉が記されている。現実ペンで書く行為を想定すればもちろん不可能な記述と解釈されるだろう。逆に、猫が語るといふ小説の設定からしてフィクションの決まり事であると言えそれまでである。むしろ、猫の最期において、経験と言語の解離が見事に露呈していることが重要である。むしろ、「現実」と呼ばれるものの構成の仕方が問われているからである。



もうよさう。勝手にするがいゝ。がりがりはこれ限り御免蒙るよと、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になつてくる。苦しいのだから難有いのか見当がつかない。水の中に居るのだから、座敷の上に居るのだから判然しない。どこにどうしてゐても差支はない。只楽である。否、楽そのものすらも感じ得ない。日月を切り落し、天地を粉塵にして不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んで此太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏、々々々々々々、難有い々々々。

（『吾輩は猫である』 十一）

以前別稿でユクスキュルの言葉にしたがつて猫の世界を「環世界」と呼んだが、仮説推論の空間では、個々の経験から世界ができてゐる。人間と猫の世界は違う。『吾輩は猫である』の猫の住む作中世界では、人間の言語が話せないという設定にそれを見てとれる。だが、猫の「環世界」自体を読者に伝えるのはあくまで人間の言語である。小説のフィクショナルな特性が必要な理由である。

この設定が有効なのは、猫が行為する場合にかぎられる。つまり猫が路地を徘徊し、金田家を探偵している場合に環世界が非言語的な関係としてのコミュニケーションを行なっているから可能である。しかし、猫が登場人物たちの話をただの聞き手となると、自らの生活世界の外側に身を置く観察者となる。猫の環世界でのコミュニケーションは背景化し、発話行為の力の次元は認識と意

味の次元へと変貌する。

『吾輩は猫である』終盤、猫はほとんど観察者となって苦沙弥郎の居間で「太平の逸民」たちの饒舌な主張の聞き役となっている。それゆえ逆に、酔っぱらった猫が、一人称では表象不可能な死の経験に向かう最後のシーンになると、経験と言語の溝がことさらに明確になるように感じられる。猫の経験が言語表現できないのではない。猫の生活世界ではもとそうである。むしろ、前提を共有するリアリズム的世界観に対して、経験と言語はそもそも対応していないという面が前面に押し出されるのである。読者は経験と言語が一致したかのように思っていただけである。

読者に人間の言葉をしゃべる猫、という設定からもその経験世界自体を取り出す場面が最後のページなのである。経験と言語の溝は広がり、体内循環する体液（ヒューモア）が生命を横溢させる。このとき猫の言葉は、同じ集合内の対象を取り出そうとしているのではなく、別の集合を当て推量しているのである。

『文学論』第四編は、これまでの修辭学の「徒に専断的分类」に対して、経験を基盤にした新しい修辭学を創出した。この斬新な分類には、経験と言語の溝という大前提が存在する。活喩（擬人法）にあたる「投出語法」から着手し、「投入語法」「自己と隔離せる聯想」「滑稽的聯想」「調和法」「対置法」「仮対法」と分類し、経験と言語が一致する「写実法」を加えて、最後に「間隔論」として概括している。この分類には経験と言語は一致しないという前提がある。だが、言語を使う人間世界では、両者は相即して作

動している。

この分類の中で、経験と言語の溝が最も際立つのが「対置法」のバリエーションである「不对法」である。ある場面にそれに相応しくないような対置する言葉を用い、権威を格下げして笑いを引き起こす効果を狙う修辞である。これには二種類あると漱石はいう。

人工的不对法は二種類の形式によりて実世界に出現す。その一は悪戯にして、他は虚言なり。この二方法を用ゐるときは、吾人は他をして一種の矛盾に陥らしむる事を得。例えば正装せる紳士の帽を纏ふに紙鳶の糸を以てして、これを泥土の上に落下するが如し。この二種の形式を以て不对法を実世界に应用するとき、吾人は他を矛盾の境に置くの責任者たる点において多少の不徳義を遂行せざるを得ず。故にその目的物にかかる目的物となつて自己の矛盾を興ありと見るほどの洒落なるものか、または神経遲鈍にしてこの矛盾を感じざるものか、またはある事情よりしてこの矛盾の不便と不面目とを受ける価値あるものならざるべからず。一たびこの形式を濫用して憚らざる時吾人は目的物の矛盾より生ずる滑稽感を味わふの暇なきうちに却つてこの不徳義を犯したる無頼漢を妬むに至る。

(第四編「文学的内容の相互作用」第六章「対置法」第三節「不对法」『文学論』所収)

「悪戯」と「虚言」の範囲は画定されない。読まれるものとして「実

世界」に存在すると、言語コミュニケーションだけでなく、経験世界を巻き込んだ発話行為の力の空間に入るからである。それゆえ、読者に「不徳義」を感じさせる場合も出てくるだろう。だが、そう考えられるのは、漱石が当初から経験と言語を区別したからである。『吾輩は猫である』では、経験は言語に集約されないとして言語と経験を別とする猫が登場した。しかし、その最後のシーンでは、経験にすら集約されない猫の死の場面を猫に語らせる。

『吾輩は猫である』から『文学論』を見ると、漱石が「不对法」によって提示したのは、経験と言語が別であるということ以上のことである。おそらく経験と言語は別々のシステムであり、それらは生によつて接触し合っているが、別々の動きをしている。経験を基盤として修辞を分類する漱石が「喜劇」に見ているものは、単なる「不徳義」ではない。経験とは別のシステムを構成する言語自体の動きであり、その出会うしかたによつては経験も個々の生を超える可能性をもつ。<sup>13)</sup>

『文学論』で「科学上の真」と区別された「文芸上の真」は、論理空間での意味の画定を目指す言語的コミュニケーションではなく、関係を紡ぐコミュニケーションでもない。両者の出会う発話行為の時空である。このため、実証科学的な経験と言語の一致という言語使用はつねに批判されてきた。しかし、『吾輩は猫である』では、言語と経験を区別すると生を超える記述も可能になり、経験が個々の生に留まらない場合も描き出した。

なぜなら経験は、生きたそのつどの瞬間のそれではなく、長い

時間をかけて習慣や記憶を形成しなければ足場にならないからである。足場になれば、経験は言語に一致させようとするだろう。これでは逆戻りになる。ヒューム以来、経験論において想像力が問題になるのはこの地点である。<sup>(14)</sup> そうなると、「実世界」(漱石)から見た「不对法」での「悪戯」と「虚言」は「不徳義」というより経験と言語の核心に位置する。仮説推論を行なう小説のフィクションの力が、「文芸上の真」に必要なのはこのためである。

## 【注】

- (1) 小宮豊隆『夏目漱石』(一九八六・二二—一九八七・一 岩波文庫) 参照
- (2) 前田愛『近代日本の文学空間 歴史・言葉・状況』(一九八三・六 新曜社) 参照
- (3) グレゴリー・ベイトソン『精神の生態学 改訂第2版』(佐藤良明訳 二〇〇〇・二 新思案社) 参照。なおベイトソンの「言語」はコンピュータ言語と呼ぶような場合も含む論理的な言語である。
- (4) 同右
- (5) 小林信彦『小説世界のロビンソン』(一九八九・三 新潮社) 参照
- (6) エドウィン・ミューア『小説の構造』(一九五四・六 ダヴィッド社) 参照
- (7) 『吾輩は猫である』(八) には、苦沙弥先生と落雲館中学の生徒たちとの争いを語る猫はアリストテレスの四つの液の知識を披露しながら、先生の逆上の様を観察し、現代は血液しかなかったと述べるくだりがある。この点については、拙論「体内循環する humor — 夏目漱石

- (8) 『吾輩は猫である』における写生文の経験——(工学院大学研究論叢 44・1 二〇〇六・一〇) ですでに述べた。
  - (9) 拙論「生きた世界のコミュニケーション—夏目漱石『吾輩は猫である』(二)——(三) にみる推論のタイプ—」(『文藝と批評』第10巻第4号 二〇〇六・二) 参照
  - (10) 小林英夫『夏目漱石の文体について』(『小林英夫著作集8 文体論的作家作品論』一九七六・二 みすず書房) 参照
  - (11) 榎垣立哉『西田幾多郎の生命哲学』(二〇〇五・一 講談社現代新書) 参照。また『善の研究』(講談社学術文庫版 二〇〇六・九) の注釈者小坂国経は、引用部の西田の「純粹経験」の説明について、「現在の意識がそのまま持続している間は純粹経験であるが、現在の意識が、なんらかの理由によって、例えば連想によって、ある過去の意識と結びついた時、そこに意識の分裂が生じ、現在の意識と過去の意識との関係から、意味や判断が生ずる、と考えられるのである」と注釈している。
  - (12) 藤田正勝『西田幾多郎—生きることと哲学』(二〇〇七・三 岩波新書) によれば、西田は「事実其の儘」あるいは「純粹経験」について「事実には主語も客語もない」と断章に記したとして(旧版全集 一六・二八三)、言語について、「風が」というように、まづいま生起している出来事の主体を確定し、その主体の動きなり変化として出来事を説明すること、それは出来事を固定化し、分割し、その一部を取り出すことにはならない。」と説明している。
  - (13) 注(8) 参照
  - (14) 漱石は「不对法」を人間の「実世界」という経験と言語が対応する側から分析し、その後すぐ「写実法」の分析に入るために、『文学論』では想像力の問題はネガティブな面が強調されている。「文学的内容の形式」という設定を、修辭分類に通したとき、人間が人間に向かつて書くという、一度退けた演繹や帰納の推論形式における同一空間内の世界設定が前景化しているように思われる。
- 『文学評論』(一九〇五・九—一九〇七・三「一八世紀英文学」として講義、一九〇九・三 春陽堂刊) で、漱石も、イギリスの十八世紀の状況を解説する際、ヒュームに言及しながら、観念と印象の度合いの差異は経験を形成するが、それが認識主体には至らないという経験論の立場に注目している。後に、ウィリアム・ジェイムズは『根本的経験論』(一九一一) でそのつどの経験がバラバラであり、統合するのは

思惟であるという経験論の経験概念に対して、それをつなぐものも経験であるという見解を打ち出した(邦訳 榊田啓三郎・加藤茂訳 白水社 一九九八・五)。

(ながの ひろし 本学非常勤講師)